

症例報告を書きましょう！

－大きなエビデンスも症例報告から－

角田 晃一[†]第77回国立病院総合医学会
2023年10月20日 於 広島

IRYO Vol. 78 No. 4 (216–220) 2024

要旨

日常の診療中に、病を持った患者さんと真摯に向き合うことで見いだせる発見をした際、独り占めせずとその新しい病態、診断法、治療法などを多くの人にまず提案して、その発見を皆に育んでいただくための第一歩が症例報告である。NHO病院は現状のEvidence医療では理解できない対応できない病態に遭遇する機会に恵まれている。「報告が皆無！」ということになれば、常識を覆す発見“EUREKA”かもしれないし、今後の医学研究のseeds（種）になるかもしれない。臨床が落ち着いた時間を利用して人柄の信頼できる人に相談する。症例報告を書くための心構え、準備、患者やその家族との接しかた、掲載された後の周囲を含む変化や起きるであろう事態と、その対処法など重要である。書くなら世界のtop journalに投稿するのが一番安全であり、編集者も見識が高く、その発見に広い視野から、思わぬ視点で評価してくれる。専門分野であればなおさらその分野のtop journalに投稿することが肝要である。気取らない表現で、中・高生でも解るような、語りかけるように簡単な英語で最初から書き、米・英の人のnativeチェックを受ける。投稿して落ちてても、落胆せずに上から順番に投稿してゆく。インパクトファクター（IF）の高いところから攻めるのが基本だが、必ず適宜PubMedとJCRのIFを確認する。先ずは挑戦が重要である。論文を書いても出世や収入には反映されないかもしれない、ただいつの日か国民、人類のために貢献できることは確実である。日本語で読んでもらいたい、英語に抵抗がある場合は、まず「医療」への投稿をお勧めする。

キーワード 症例報告, 発見EUREKA, 研究のseeds（種）, インパクトファクター, PubMed

はじめに

医学の世界で、科学的根拠に基づいた医学、つまりEvidence based medicine¹⁾のある治療方針が求められ、現在広くEvidenceという言葉が一般的になってきた。この世界で良く用いられる医学の

Evidenceはその哲学の起源は19世紀半ばまでさかのぼり、近年は広くさまざまな目的で使用されている¹⁾。Evidenceは医療の標準化推進にともない、患者の診察、検査や疾患の治療など最低限の標準治療を目的としており、厚生労働省の指導のもと各学会が診療ガイドラインを作り始めて今に至ってい

国立病院機構東京医療センター 臨床研究センター 人工臓器・機器開発研究部 [†]医師

著者連絡先：角田晃一 臨床研究センター 人工臓器・機器開発研究部長

〒158-8902 東京都目黒区東が丘2-5-1

e-mail: koichi.tsunoda@kankakuki.jp

(2024年1月18日受付 2024年8月2日受理)

Why Don't You Write a Case Report in English

Koichi Tsunoda NHO Tokyo Medical Center

(Received Jan. 18, 2024, Accepted Aug. 2, 2024)

Key Words: case report, eureka, seeds for medical research, impact factor, PubMed